

「第1回 山と自然の聖地の集い」に寄せて

「第1回 山と自然の聖地の集い」が、平成26年4月24日18:00から、ニュー新ホール（東京・新橋）で27名が参加して開られた。この集いは「山の自然の聖地研究会」が主催したもので、山岳における自然保護の在り方を見つめなおすため、「自然の聖地」の意味について理解を深めるための学習会として行ったもの。

開会挨拶の後、主催者側から開催までの経緯を説明した後、まず国際自然保護連合（IUCN）日本プロジェクトオフィスの古田尚也氏から「『自然の聖地』とは何か―国内外の動きと今後への期待」と題した講演と、山の自然の聖地研究会チームの紅葉淳一氏から「『山の神々』と自然保護活動」と題した講演が行われ、「山と自然の聖地活動に向けて」と題した参加者全員によるフリートークで、2時間ほどの集いを締めくくった。

古田氏講演要旨：

『自然の聖地』と題する保護地域管理者のためのガイドラインの日本語版が2013年に出版された。この出版の筆者の一人である古田氏から自然の聖地の意味について伺った。「富士山の例にみられるように、特定の自然に対して特別な精神性を見出したり、それを信仰の対象とすることは、日本だけではなく、世界各地で古くから見られる事柄である。こうしたいわゆる『自然の聖地（SNS: Sacred Natural Site）』に関して、その生物多様性保全に対して果たしてきた役割が、近年世界的にも改めて注目を集めている。」とし、冊子『自然の聖地』をテキストに、人々とコミュニティにとって特別な精神価値を持つ場所である『自然の聖地』の意味には、自然保護に関する倫理が含まれ、法的な保護地域と同様の機能を果たしてきただけでなく、生物多様性と文化的特性の維持の双方に貢献してきたとしたと評価する一方、昨年11月に開催された第一回アジア国立公園会議では『自然の聖地』と保護地域のセッションが設けられ、自然の聖地に関するアジアのネットワークの設立にむけた動きが開始されている点を挙げ、「文化や精神性と自然保護の結びつきについて、自然保護行政の中でも正面から議論を行う機が熟してきているのではないだろうか。」と講演を結んだ。

紅葉氏講演要旨：

紅葉氏は神奈川県林務行政に長年関係してきた経験から、林業のサービスを定めた「斫伐（しゃくばつ）規定」のことを引用して、『山の神』のお参りを挙げ、危険な林内作業での安全確保や連帯感の醸成などで、『山の神』の精神的効用を評価、「自然保護が叫ばれて40年が経過しますが、木を植えよう、緑を増やそうとの意見は沢山ありますが、私は、森林を伐採しないと山は守れないと考えています。山の神のことを思い出し、国有林、県有林等の伐採夫を中心に信仰されてきた、『山の神』にもう一度、お出ましを願い、過疎化が進み、荒廃していく農山村に活力を与え、農林業を中心とした、経済が復活し、森林を甦らせて、誰でもが親しめる社会を作り、楽しく登山が出来る環境を整備し、『山の神』の祠を訪ねたいと思っています。」とした。

フリートーク

フリートークでは、『聖地』という言葉が欧米の訳語であるうえ、概念が定まらず意味を取り違えることがあるし、日本の風土に合った表現とは言い難く、違和感があるとの指摘が会場からあった。また、固有の風土や精神文化で成り立ってきた『山の神』のように、日本人の自然に対する心のルーツを掘り起し、これからの自然保護のありかたを研究するべきとの意見もあった。講師の古田氏も「生活の中、文化の中にある感覚、慣習を手掛かりにして、日本の自然保護を作っていく、再発見していくことが重要なのではないかなと思います。」と示唆した。

「世界の自然の聖地や自然保護」と「日本の自然の聖地や自然保護」の考え方には随分と違いが指摘されるフリートークとなった。

まとめ

「山の自然の聖地研究会」の活動目的は、日本の山岳にあって、生態系の劣化、森林の荒廃、遭難の増加が進むなかで、人と山の自然との適正な関わりを持つことが求められている現状に鑑みて、山への畏敬の念や自然への感謝の気持ちを掘り起こし、山でのマナー・ルールを再認識することにつなげ、山と自然の聖地に関する歴史や文化、施策を学び、発信することで、“山岳信仰”や“自然崇拜”を再評価し、山での精神文化の高揚を図ることにある。

そして、この活動をとおして、新しい時代の山での自然保護と適正利用のあり方を創り出し、山の自然と文化の認識を深めることを目的に活動する。」としている。

この研究会は、昨年12月に第一回目の準備会を持って以来、数回の打ち合わせを重ねてきて、第一回目の活動が今回の「第1回 山と自然の聖地の集い」になった。

研究会の名称に含まれる「自然の聖地」の意味について、本来の意味を探ることが今回の開催の目的の一つでもあった。しかしながら、今回の開催を終えて、各様の解釈があって、明確な解が得られるものないことを悟った。一方、言葉の意味はさておいて、活動の目的については時流に即応したもので、「自然の聖地」の持つ精神的側面に学び、山岳自然保護へ適用するとのアプローチは、新しい可能性を秘めていることを、講師や参加者の発言などから確信できた。

「山の自然の聖地研究会」では、今後に向け活動と一緒に進めていただく研究メンバーを募っています。一人でも多くの興味ある方の参加を期待いたします。

(松隈 豊 記)



講演する古田氏



熱心に聴講する参加者